



TITLE:

近代日本における自然愛に関する 教育論の歴史的研究(Abstract_要 旨)

AUTHOR(S):

林, 潤平

CITATION:

林, 潤平. 近代日本における自然愛に関する教育論の歴史的研究. 京都大学, 2019, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2019-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21851>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	林 潤平
論文題目	近代日本における自然愛に関する教育論の歴史的研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、自然愛の情操の養成をめざす教育実践の議論を「自然愛に関する教育論」ととらえたうえで、それがどのような文脈で登場し、どのような内容をもつものであったのか、そして歴史的状況の変化とともにどのように変遷していったのかを考察したものである。</p> <p>序章では、問題意識の確認、先行研究の整理、分析手法の提示が行われ、その上で、自然愛に関する教育論が、明治から昭和戦前期までの理科・地理・国語の教育論においてどのように展開されていったのかを考察するという、本論文の課題が示されている。</p> <p>第1章では、まず明治期の理科教育界においてはじめて自然愛に関する教育論が登場したことや、明治24年の小学校教則大綱で「天然物ヲ愛スルノ心ヲ養フ」という自然愛に関する理科教育の要旨が規定されたことが指摘されている。その上で理科教育界に大きな影響力をもった棚橋源太郎の議論が検討され、彼が自然愛の心情を自然の「真」及び「美」への愛という点からとらえたことが述べられている。棚橋のとらえ方はその後定型化された議論となっていくが、自然の「真」への愛とは産業の隆盛や科学的な成果の結実という近代化を推進するための役割、自然の「美」への愛とは労苦の付随する日常生活を慰藉によって解消するという近代化に伴い発生する矛盾を修繕させるための役割を果たしていたと、学位申請者は意味づけている。</p> <p>第2章では、大正期から昭和10年頃までの理科教育界にスポットがあてられ、明治以降の自然愛に関する教育論の展開過程が論じられている。この時期には、自然の「真」及び「美」に対する愛という視点が継承されていく一方で、近代化を批判する可能性をもった主張や、近代化の目的を第二義的に位置づけた主張が、新たに登場することになった。このような多様な主張の展開によって、従来の定型の瓦解ともとれる状況が理科教育界では生まれていたという。</p> <p>第3章では、戦時体制下の理科教育界における議論が検討されているが、ここでの特徴は、資源・物資という自然物への愛という主張が数多く登場するようになったことである。またこの時期には、これまでの理科教育論ではほとんど強調されていなかった、自然愛の心情を日本人の国民性としてとらえ、この国民性の議論と関連づけながら、自然愛の心情の教育を主張していく議論も登場してくるという。それは新たな定型の創出を意味しており、最もエコロジ的な側面が強調された性格をもちつつ、戦争遂行を可能とするための近代化をめざす教育論であった。そしてそれは、かたや近代化という自然の征服を是認する営みを推し進め、かたや自然の征服を批判するエコロジを求めるという、矛盾した志向性を内包するものであったと学位申請者はとらえている。</p> <p>第4章は、地理教育の分野における自然愛に関する教育論の展開過程を考察したものである。自然愛に関する教育論は、地理教育では国土愛の心情の養成として誕生したが、それは国民化の実現をめざすものであり、なおかつ良き国土像という、自然に関するナショナル・アイデンティティの認識を含むものであった。しかし大正期から昭和10年ごろにかけては、国際的視点の重視により「美しく、恵まれた、特別な国土」像が相対化され、世界の他の地域の自然を愛することと同様に国土を愛すべきことが唱えられるようになっていく。ただ戦時体制になると、自然愛に関する教育論は軍国主義化の様相を示すようになり、再び国民化の目的を達成する方向へと議論が転回するとともに、国土</p>			

と歴史との関連、国土と祖先との関係といった視点から、「特別さ」を強調した国土像が顕在化してくることになるという。

第5章では、国語教育界における議論が検討されているが、国語教育では地理教育と同じく国民化の実現を志向しながら、なおかつその教育論には、「日本人は自然を愛する国民である」という主張が含まれていたことが述べられている。この主張が登場するのは第3期国定教科書期(大正7～昭和8年)であるが、第4期国定教科書期(昭和8～16年)になると自然愛に関する教育論は日本精神論という新しい思想潮流と結びつくことによって、より高次のレベルの国民の自覚を求める議論へと変化していく。そして第5期国定教科書期(昭和16～20年)では、日本人の自然愛の情操を戦争に寄与する心情ととらえ、このような心情を養成することをめざすようになるという。

そして終章では各章のまとめがなされ、論文全体の総括が行われている。本論文から明らかになったことは、近代日本における自然愛に関する教育論が、近代化及び国民化という目的を達成するために構成・展開された議論だったことである。近代日本は、社会の近代化及び強固な国民国家の形成によって、欧米諸国に対抗しうる政治的・経済的な力量を獲得することを一貫して追求してきたが、自然愛に関する教育論には、このような近代日本の歴史的状況が反映されており、歴史的状況の変化に応じてその主張内容を変化させていったことが、本論文によって明らかになったといえるだろう。

(論文審査の結果の要旨)

地球環境問題への意識が高まりを見せる中、教育界においても地球環境の危機への対応を模索する議論が行われ、環境教育の必要性が主張されている。またその際、「日本人は自然を愛する国民である」という人口に膾炙した表現がしばしば言及され、自然愛の心情を育むことの重要性が語られたりもしている。しかし、このフレーズのよってきたるゆえんや、自然愛と教育をめぐる問題を歴史的に考察した研究は、ほとんどなされていないのが現状である。このような研究状況に対して、学位申請者は自然愛の情操の養成をめざす教育実践の議論がどのような文脈で登場し、どのような内容をもつものであったのかを明らかにしようとしており、これまでほとんど研究が行われてこなかったテーマに果敢に挑んだ点に、本論文の第一の意義が存在する。そして学位申請者はこの研究課題を遂行するにあたって、明治初期から昭和20年までの、主に小学校教育における理科・地理・国語の教科論、教授論・学習論、教科書・教師用図書などに対して幅広い史料調査を行い、それらを用いて自然愛に関する教育論の内容、目的、機能などを分析している。これらの多様な史料を渉猟しながら、自然愛に関する教育論の全貌に迫ろうとしたことは特筆に値することであり、研究課題の設定や史料の選定という点において、非常に独創的な研究となっている。

そしてこのようにして進められた本研究は、自然愛に関する教育論を、自然の「真」と「美」への愛、近代化と国民化という視点から考察することで、学校教育における自然愛の教育の意味を明らかにしたのであり、ここに本研究の第二の意義を見出すことができる。具体的に述べれば、本論文によって、理科教育における自然愛の教育論は、産業の隆盛や科学的な成果の結実としての自然の「真」に注目することで、「真」への愛が近代化を推進する役割を果たしており、他方で自然の「美」への愛を語ることで、労苦が付随する日常生活を慰藉し、近代化に伴い発生する矛盾を修復させる役割を果たしていたことが明らかになった。また地理教育や国語教育においては、国土愛や良き国土像が提示されるとともに、「日本人は自然を愛する国民である」という主張も行われ、これらを通した国民としての自覚の形成が図られたことが指摘されている。このようなものとして、自然愛に関する教育論は近代において登場してきたのである。

さて、このような内実をもつ思想として登場した自然愛に関する教育論は、大正期から昭和10年ころまで、さらには戦時体制下において、歴史的状況の変化にともなうて変容していくが、その変容のありようが考察されていることが本論文の第三の意義である。つまり、大正期から昭和10年ころまでは、大正新教育運動や生活綴方運動の展開、国際的視点の重視という機運の中で、自然愛に関する教育論においては近代化や国民化の志向性が弱まっていき、議論の多様化がみられるようになっていった。その結果、近代化を批判する可能性のある議論や近代化という目的を第二義的に位置づけた議論、「美しく、恵まれた、国土」というナショナル・アイデンティティを相対化した主張が行われたことが指摘されている。しかし戦時体制下になると、戦争遂行を可能とするために、再度、国民化や近代化の志向性が強まっていき、近代化という自然の征服を是認しながら、それを批判するエコロジーを求める主張の展開や、国土と歴史・祖先との関係という「特別さ」を強調した国土像の提示、日本人の自然愛の心情を戦争に寄与するものととらえる主張がみられたことが、本論文で明らかにされている。

このように、自然愛に関する教育論を歴史的に解明しようとした本論文は、明治初期から昭和20年までを射程に入れることで、その議論の内実だけでなく、歴史的状況

の変化にともなう変容までも描き出すことに成功している。ただ、自然愛の議論の背後にはどのような哲学が存在していたのかを考察し、近代化や国民化、自然や愛、エコロジーなどの概念をもっと明確に定義づけて論文中に用いていれば、よりダイナミックな叙述が可能となり、単線的な描き方から脱することができたのではないかと考えられる。本論文にはこのような不十分さが存在しているが、もちろんこれらは今後の研究のための課題として残されたものであり、これによって本論文の価値が損なわれるものではない。

よって、本論文は、共生人間学専攻人間社会論講座人間形成論分野の理念に適った論文であり、博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また平成30年12月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降